

劣るかと予測されたが、予期よりも楽に直立して歩くようになり、自由に行動している時にも、二足でいることが少なくない。本格的な芸の調教にはなお時日を要するが、今後の経過に期待している。なお、このクロベエの調教に関しては、猿舞師五月三郎師の協力を得たところが大きい。記して深謝する。

一方、すでに一応の芸を修得している2頭のニホンザル(チョン平、六助)については、芸の向上の上の努力と観察をはかった。両者の間の違いは、身体機能上の差はあるとしても、大きく性格上の違いがあると痛感される。身体的面の特性については、下記のデータ記録の分析をまわって、明らかにされるものと期待している。

なお、以上に関連の簡単な記録は当猿舞座発行の「猿舞座紀行」(創刊号、1983年11月)にもとどめた。また、83年12月に、以上のサルとともに大阪に滞在し、本課題研究の岡田守彦先生グループの研究に参加し、研究データの記録に協力した。一部のデータは、サルがテレメーター装置に馴れていないなどのために採取不能だったので、ダミーの装置に平生馴れさせる過程をとり、なお次年度に充実をはかることとなった。

課 題 6

手の骨格の形態発達に基づくマカクの身体発達の分析

浜田穰(日本モンキーセンター)

ヒトにおける研究で、手の骨格の発達が、全身の発達程度を知る良い指標であると広く認められている。比較の見地から、マカクにおける観察、特に縦断的な初期発達観察の例はごく少ない。

本研究ではTW2法(Tanner, et al., 1975)に準拠し、出生から約1年間のマカクの手の骨のうち12個所の発達を観察した。12個所の内訳は、橈骨遠位・尺骨遠位・第一中手骨近位・第三中手骨遠位・第五中手骨遠位・第一基節骨近位・第三基節骨近位・第五基節骨近位・第三中節骨近位・第五中節骨近位・第三末節骨近位・第五末節骨近位である。観察に用いたマカクは、京大霊長研で飼育されている *M.f.fuscata*, *M.f.yakui*, *M.mullatta*, *M.cyclopis*, *M.fascicularis* (以上, “fascicularis group”), *M.nemestrina*, *M.speci-*

osa, *M.radiata* (以上, “non-fascicularis group”) で、縦断的に観察した。

TW2法のスコア系(各骨要素にその発達段階、A~HまたはA~Iに従って点をつける)は、ヒト資料をもとに作られているので、マカクにそのまま用いることは不可能である。そこで本研究では、一発達段階増すごとに一点加えることにし(骨端未出現-A段階を0点として)、全観察個所の点を加算した得点を個体の手の骨の発達指標とした。

マカクの手の骨格は、ヒトに比べると非常に早く発達し、その発達程度は出生時、ヒトの約5歳に、1歳時では約13歳に相当する(オスでの比較)。マカクにおいてもヒトと同様、メスの方がいくらか発達が早い。マカク内で比較すると、発達は *fascicularis group* が *non-fascicularis group* より遅い。*group* 内で *M.f.fuscata* は遅い方であり、*M.f.yakui* はさらにそれより遅い傾向を示す。このような *group* 内種差は *M.f.fuscata* と *M.f.yakui* で各観察個所が少しずつ遅いことに加えて、第一指の骨端と末節骨の発達が遅いことによってもたらされる。*group* 間の発達の遅速差は、*fascicularis group* 内であまり差の見られない観察個所の差によってももたらされる(例、橈骨)。

霊長類における初期親子関係の種間比較

根ヶ山光一(阪大・人間科学)

親子関係は繁殖活動の一環をなす重要な側面であり、その種間比較を行うことは霊長類の適応の問題を考える上で有効であろう。本研究は、マカクを中心に、親子関係の様態をとくに母子関係に注目して比較し、あわせて実験事態を導入してその分析的検討を行おうとするものである。

観察を行ったマカクザルは、ニホンザル、ヤクザル、タイワンザル、カニクイザル、ボンネットザル、ベニガオザル、バーバリーエイプ、シシオザルである。57年度の研究から、母子関係には2つのタイプ、すなわち“淡白型”と“粘着型”が指摘できたが、本研究では、カニクイザル、ボンネットザル、ベニガオザルが淡白型、残りが粘着型に分類された。Foodenによれば、カニクイザルグループとして一括されるニホンザル、ヤクザル、タイワンザル、カニクイザルが、このように